

素敵な英語音が口から こぼれる魔法使いになるための 3つの心得

こんにちは！
サウンドイングリッシュボイスコーチHiroyoです。

今日は皆さんにお会いできて、とても嬉しく、そして、わくわくしています。

なぜなら、この動画を見終わる頃には、
皆さんは様々な英語の音の悩みから解放されるからです。

さて、私は、今では、ボイスに関するお悩みを解決するボイスコーチとなっておりますが、以前は、ピアノ弾き語りをするミュージシャンでした。

一番初めに私が悩んだのは、英語の歌がうまく歌えないということでした。

そこで研究を重ね、今では歌だけではなく、
語学としての英語の音についてまで語れるようになりました。

そこで今回はその英語の音についてお話しさせていただきます。

音楽が全てを教えてくれた

声は、体を楽器として音を出していきます。

例えば、ピアノは鳴らし方がわからないとか、調律がちゃんと出来ていないと、単なる木のデッカい箱です。

役にも立たないってことになってしまいます。

ところが、すべてがうまくいった時には

素晴らしい音楽を奏でてくれる、
素晴らしい音を出すことができます。

それでは、早速内容に入っていきます。
本日はお話しする大事な点は以下の3点です。

内容は後ほど詳しく解説しますので、
ここでは大まかな説明をさせていただきます。

まず、1点目は「日本語が英語の音を邪魔している」ことです。

日本語は、私たちにとってコミュニケーションで欠かせない音ですが、それが足かせとなっているのです。

でも、ネガティブに考える必要はありませんので安心してください。

2点目は「**子音と母音について**」です。

皆さんは子音・母音の違いは何だかわかりますか？

きっと英語の音を勉強する時、
子音と母音は大切だと言われた経験があるはずです。

本日はこの子音・母音についても、詳しく説明していきます。

最後に3点目は「**リズムの仕組みについて**」です。

英語の音を活用し、リズムの作り方をお伝えしていきます。

日本語が英語の音を邪魔している

それではまず、1点目の日本語が英語の音を邪魔することから解説していきましょう。

あなたは、**日本語は視覚的で英語は聴覚的**という話を聞いたことはあるでしょうか？

例えば、日本語で友達と会話をしていて、漢字が思い浮かばない時に

「え？どういう意味なんだろう」

っていうふうに、頭の中をぐるぐるっとハテナマークが走ったことはありませんか？

この前、大人の生徒さんと話をしていた、

「音程を正確に取るためには、セイドを上げる、これが大切なんですよ」

と言ったとき、その方は、ハテナ？って顔をしたんですよ。

そして、

「セイドってなんですか？」と聞き返してきました。

えっ？と思って、よく話を聞くと、

私が言ったセイドとは、精密さとか正確さとかそのような意味（精度）で使ったんですが、

生徒さんは、頭の中に浮かんだ言葉がルールとかそんなような意味の「制度」だったんです。

確かに音も発音も一緒ですし、文脈的にもどっちが使われていてもおかしくありません。

しかし、文章の意味は違うものになってしまいます。

言語として日本語を使っている場合、脳が言葉を意味化する時に、日本人の場合は圧倒的に視覚からの情報が多いのです。

音を聞いていてもビジュアル（漢字）が頭の中に思い浮かんでいる感覚です。

音を聞くだけで、ビジュアルが浮かぶなんて、ものすごく複雑だと思いがちですが、私たちは知らずかなりの高等技術を使っています。

しかし、英語、フランス語、イタリア語などの、日本語よりもシンプルなアルファベットを使った言語は、組み合わせると意味はあるけど、漢字のように単体では意味はありません。

例えば「P」単体ではなんの意味にもなりませんよね？

その音の組み合わせが、意味を作っていくわけです。
音の違いで意味の違いが出てくる言語なんです。

ですから、外国語は音に対する細分化が進んでいます。

日本語は、音はざっくりと処理しながら、そこから絵に行くみたいな、もう一つステップが入って、言語として、瞬間的に処理しています。

その分、英語はその音の種類が多いです。
絵には行かない代わりに、音の種類が多いというわけです。

日本語でずっと生活していると、音を聞き分け、頭で分析するという部分が弱くなっているのです。

人間として生まれた時は同じ能力を持っていますが、私たちは、日頃から、音に対する訓練をされていないので、

音を聞き分けるのが不得意というのは止むを得ないことです。

日本語という世界の中に生まれてきたら、等しく日本人はそういう状態になっています。

しかし、日本人の中でも音楽に携わっている人達は少し違います。

音楽のように、情報のすべてが音の中にある場合、ちょっとした違いが命取りになります。

そのため音に対する集中力や、音楽家は、**音を分析する力が知らず知らずに訓練されている**わけなんです。

そのため、ちょっとした音の違いを違いとして脳が認識することができるというわけです。

でも、・・・別に今からピアノを練習しましょうなんてことは言いません。

英語は言語ですので、音だけではなく意味もくっついてきます。

そのためちゃんとフォルダ分けがしやすくなるので、英語という音の違いさえわかれば、変な日本語の癖につかまらずに済むということになります。

そして、もう一つ注意しなければいけないことは、**母国語を守ろうとする習性が人間の脳にはある**ということです。

なぜなら、様々な言語が入ってくると、母国語が崩れてしまう危険性があるからです。

ちなみに、この習性は日本人に限ったことではありません。

例えば、長く日本を離れていたりすると、日本語の発音が変になったりすることがあります。

少し崩れかかっているわけですが、その場合でも無意識で母国語を守ろうとしています。

他の言語をシャットアウトしようとする脳の働きも自然に備わっているので、せめぎ合いをすることもあります。

ただ、大人の私たちは理屈さえわかれば、感情に振り回されずに整理することができます。

日本語は視覚的、そして英語は聴覚的であるから私たちはちょっとやりにくいだけで、それはあなた自身が悪いのではないよということです。

子音と母音について

次に2点目は子音と母音の違いについてです。

はじめにも質問として投げかけましたが、

子音とは何ですか？

母音とは何ですか？

母音が答えやすいと思いますので、まずは、母音からいきましょう。
どう思いますか？

多くの方は母音は「あいうえおです」と言う方が多いですし・・・
では子音は？と聞くと、「あいうえお以外です」と回答します。

それでは、説明にならないので、今日は、別の角度、役割という視点から話していこうと思います。

ではまず、子音から。

子音は、ノイズと考えていただきたいと思います。

手を叩くのも、ノイズですが、口で作出すノイズで、一番使うものは息です。

ですから、この息の流れを変化させてできる音の子音という風に考えていただければと思います。

一体、何を、どうやって変化をさせるか？

例えば、「P」の音だったら、まず、唇をしっかりと閉じて発音します。

そして「Th」の音だったら、歯と歯の間に舌を挟んで、息をそこに流す。

「Th」は、歯と歯の間に舌があるので息が出にくいです。
そして、その出にくい音でいいのです。

そして「H」だったら、口をそのまま開けて音を出す。
何の妨げもない、一番息が多い音かもしれません。

では「R」はどうでしょうか？

「R」が一番難しいと感じると思うのですが、
「R」は舌を丸めるとか、舌を巻くとかではありません。

「R」は、口の中に何かの障害物があるために、息がちょっと出しにくいという風に考えてください。

「H」に比べれば出しにくいと考えてください。そのために、舌を何かするだけです。

口の形を変えるだけ、舌が口の中で障害物となります。

口を少しすぼめる感じです。舌を一生懸命丸めなくてもいいんです。

息の流れをちょっと変えているというものなんです。

そして「V」。

「V」は、下唇を少し突き出して、上の前歯でごく軽く噛むイメージです。「F」も同じ形です。どちらも、しっかりと息を出します。

この練習がすごく効果的です。

このように、**息の流れを変化させることが子音**なのです。

息が出しやすい場合もありますし、出しにくいと感じることもあるでしょうが、それこそが子音なのです。

まずは、このように簡単に理解しておきましょう。

一方、母音とは何でしょう？

もちろん「あいうえお」なのですが、日本語の「あいうえお」よりも英語の母音の数が多いと聞いたことはありませんか？

数を言うと、26音あるとも言われています。
ですから、「あいうえお」=母音だと覚えられない方がいいです。

ではいったい何か？

もちろん、あいうえおという音も含まれますが、
音を伸ばすことができるものが母音だと私は理解しています。

もちろん、子音でも伸びるものもありますが、
基本的に母音が、音を伸ばしたり短くしたりするのです。

音の長さは英語にとって重要です。

日本語は音の長さにはあまり注意を払っていません。
むしろ音が長かったり、短かったりするほうが変です。

例えば、日本語で「同じ」という単語は、
「お」も「な」も「じ」も文字を発音する時、長さが同じです。

これをアメリカ人が発音するところを想像してみてください。

おなーじ

なんだか変ですよ。
「同じ」という言葉に聞こえないですよ。

「おなーじ」

そう、英語的に言うと、どっかが長いとかどっかが短いとかがすごい重要なんです。

長さの違いがあって初めて、彼らは言葉を理解できる訳で、

ところが、私たち日本人は、「おなじ」と言うように、全部が同じ長さでないと言葉として理解できない。

これは、先ほどの視覚的理解とは違う話ですが、こんなにも理解の仕方が違うということなんです。

その点からも**母音は長さをコントロールすることができる**。
持続可能な音という風に覚えてください。

これがわかってくると、英語のリズムの仕組みが見えてきます。

英語のリズムメイク

では、最後に英語のリズムの仕組みをお伝えしていきます。

音楽には「リズム」が存在しますね。

「リズム」という言葉自体は音楽用語ですが、実際、「リズム」ってどういうものかご存知ですか？

リズムとテンポは違います。

テンポとは、（曲の）一定の速さのことを指します。

リズムとは、音の長さの組み合わせです。

音の長さの組み合わせ（リズム）に、音程（ピッチ）がつくとメロディというものになります。

まるで音楽の話ですが、英語にとっても、重要視されている点です。

例えば、英語には音の高い、低いがあるという話を聞いたことがあるかもしれません。

疑問文の時に語尾が上がるとか、語尾だけでなく全体的にも高低差が存在します。

この音の高低差と、母音による長さが日本語よりも明確に存在します。

そして、さらに、音の強さも重要な要素です。

さっきの子音と母音で説明すると、強さを出すのは「P」の音です。

「pretty」「prince」の強めな音、「P」のところ、子音が得意とします。

そして長さは母音が得意とするところです。

この子音と母音を組み合わせると音程ができています。

この子音と母音を使って強弱、長さ、音程をコントロールしている点を覚えておいてください。

では実際のセンテンスに入っていきます。

The wheels on the bus go round and round, round and round.

【歌パート】

有名なこどもの曲です。

「The wheels on the bus」ですね。

バスの車輪がぐるぐる回って町を回ったって意味なのですが、
すごく簡単なセンテンスで成り立っています。

歌うと、（単純に朗読するより）とても簡単です。
だから、読み上げをするより、歌うのがいいんです。

さあそれを、ちょっと平たくして読んでみたいと思います。

【朗読パート】

どうでしょうか？

ちょっと長さに注力して読んでみました。

これを、日本語的（カタカナ英語的）に言うと

【朗読パート】

長さが足りないのがわかりますか？

日本語読みだと何かやりにくくなります。

日本語的（カタカナ英語）に読むと、
Wheelのeeの母音の長さが足りないんです。

この場合、英語らしくするために、母音の長さをしっかり取ることが重要になります。

それからroundのところですが、このroundは二重母音と言われるもので、2つ母音があります。なので、当然長くなります。

単語の中にも長さがあるって、その組み合わせであり、また、強さもありません。

【朗読パート】

これでもう英語なんです。

元が、英語で出来上がっている歌は、ほとんどの場合、通常の会話の英語のリズムを再現しています。

歌の場合、強さ、長さ、音程、音程はメロディがあるので、少し違うと感ずる部分もあります。

しかし、**リズムに関して長さ、強さはほぼきちんと通常の英語のリズムを再現しています。**

そのため**英語の歌は、英語上達にはベスト**という話になります。しかし、皆さんは、ついつい、細かいところを気にしがちです。

まずは、この長さとか強さとか音程を注意するだけで生き生きとした英語になります。

そして、このルールを感じていくと英語の音がドンドン聞こえてきます。

インプットが可能になると、アウトプットも可能となり、だんだん真似が出来るようになってきます。

では、最後に今日の3つのポイントをまとめていきます。

まず、私たちは日本語の世界に住んでいるので、**日本語的な縛りから出ることを何度も自分に言い聞かせてください。**

日本語的なところに立って英語を見てはいけません。
そこをシフトして、英語の中にどっぷり浸かり込んでください。

じゃあ、実際、どうやってどっぷり浸るかと言うと、**子音と母音について考える**ということです。

子音は息の流れを変えるもの、母音は持続可能な音ということで出来上がってくるのが英語のサウンド、リズム、ウェーブのよううねりということになります。

さあ、今からぜひ、YouTubeや英語の歌を聞いてみてください。

ポンポンと歌に合う音が耳に飛び込んできますよ。
そして、すぐ口に出して真似してみましょう。

リズムの感じ方と作り方

では、早速ワークに入っていきます。
一番初めに着目すべき部分は、リズムになります。

まずは細かい単語の発音は置いておいて、リズムを感じていきましょう。

今日のテーマはThe wheels on the bus go round and roundです。

まず1行目の、The wheels on the busの部分です。

単語ごとに切れて書かれるのが、英語なのですが。

この文章で、リズムを作るためにまず、重要なものは、
リエゾンによって音がくっついていくということです。

wheelsの最後の「s」が、次のonの「o」とくっつきます。

wheelsonとなります。

そして、最初のTheが、wheelsにくっつく感じになります。
the busも、thebusのような二つの単語が一つになるような感じになります。

「s」から一つの大きな塊のようになっています。

The wheels on the busという4つの塊のものが、
下のような感じの二つの塊になります。

The whee / lson the bus

リズムにすると、

タター タッタタ

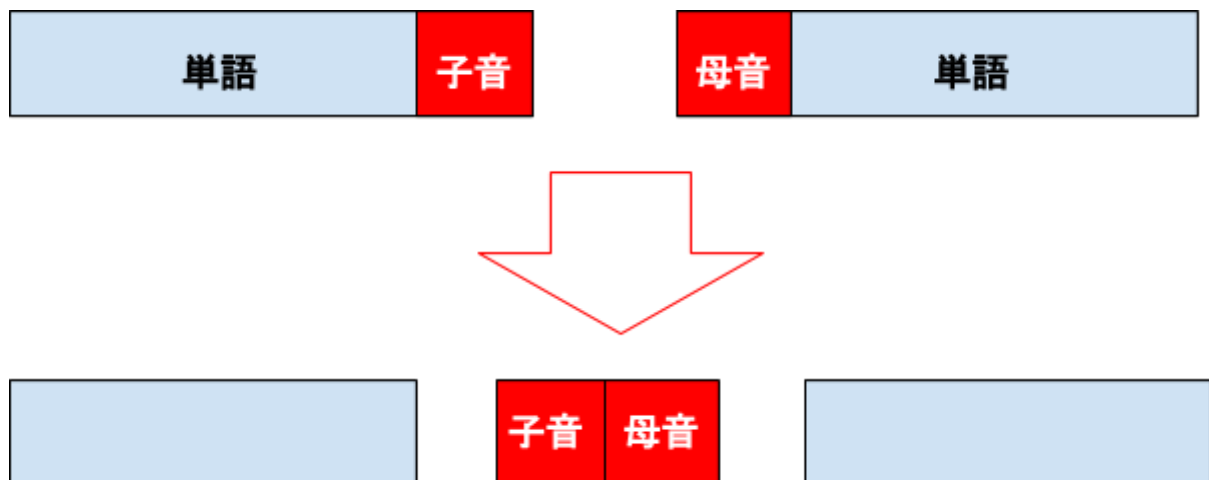
練習方法としては、

「タタータッタタ、タタータッタタ」

このリズムを2回音読した後に、The wheels on the busと言ってみてください。

この「s」が「on」にくっつく部分はリンキングと言われ、リズムを作り出すために重要な場所となります。

英語は、単語の最後が子音で終わり、次の単語が母音で始まる時に、**初めの単語の最後の子音と、次の単語の母音がかっつく癖**があります。
*Linking（リンキング）



単語ごとに考えてしまうと、実際に音として聞いた時に聞き取れない場合があるので、この点を覚えておいてください。

では、次にGo round and roundの部分です。
この部分も先程と同様にリンキングのルールが適用されます。

roundの最後のdと、次のandのaがかっついて、dandとなります。

また、andのdの音は、ほとんど聞こえません。
roundのdの音も同じく聞こえません。

dは実音としては、省略されています。

＊reduction（リダクション）

roun dan(d) roun(d)

このリズムは、こんな感じ。

タータンター（ン）

かっこのついた（ン）の時に、指を鳴らしてみましよう。

音は聞こえないんだけど、存在はあるというタイミングが掴みやすいと思います。

では、今回も2回言って、実際の言葉を言ってみましょう。

タータンター（ン）タータンター（ン）

round and round

・・・いかがでしたでしょうか？

多分、大人が練習している間に、お子さんのほうが先にできるんじゃないかなとも思います。

この**リズムで感じる**という点をしっかり覚えておいてくださいね。

では、またお会いしましょう！